

第三十一回薪能くるす桜上演記念
妙見法楽連歌 世吉 一巻

令和元年八月七日

賦何人連歌

みじか夜のたふとき舞はくるすか
館新たに山里の夏
呼子鳥鳴き交ふ森へ尋ね来て
梢の雲に緑立ちたる
おぼろ月有明空に仰ぐらん
浦波ばかりのこるみなと江
船かげのしづかな海にうつるとき
香もなつかしきふるさとの文
かもしかの声聞こえくる朝まだき
離れがたくも凍て蝶のゐて
旅先で一人して愛づ冬の薔薇
親に逆らふ走り夫婦
わかれ道こころときめき振り返り
名残を惜しみあすを見つめる
八百年の杉葉をなでて風わたる
秋立てる日の明建の杜
望の月こだまするもの鐘の音
雁のたよりは法求むるか
ままならぬ我が身を憂ひ旅行かむ
おぼろなりけり美濃の嶺みね
しなる枝の白花房に夜もあけて
霞のひまに浮かぶ釣舟

初折裏

千惠 真奈美 多美子 加緒莉 一希 千恵 瑞希 敦子 純一 春美 恵美 桂子 愛子 好博

名殘折裏

桂子 好博 一希 純一 加緒莉 敦子 春美 谷から谷へわたる轡り 雨催ふ花の下道なほのどか とけつこほりつ池の薄氷 人たゆる天に満ちたる星凍え 都大路は木枯の中 山ざとは出づればすべて珍しく 古き館の庭をめぐりて 黄昏れに吾子の手を取る影法師

〔名残折表〕

ささがにの巣のごと網を投げ入る
頼みはかなくめぐみあだなり 敦子

国境越ゆるも話まとまらず 裕雄

深雪隔つる里ぞさびしき 純一

睦言にゆかし恥ずかしいろり端 愛子

マフラー直す細き君が手 桂子

ほろ酔ひでタクシーを待つ二人連れ 好博

思ふ玉章仕舞ひ置かばや 恵美

夜も更けて静けさに聴く虫の声 恭子

手水鉢にも搖るる三日月 泉

岩陰の苔さへ露の跡見えて 一希

風船かづら茂る細道 千恵

ながむればかたみの雲は消え果てつ 敦子

歌を休みて猪穴を見む 裕雄